

率先して弱い者をかばえ

どんな小さな命も尊べ

俺は行動しか信じない

どんな時も本質をみる



### 故 中村哲医師 (73)

NGO「ペシャワール会」現地代表。アフガニスタンで30年に渡る医療支援・農業支援活動。2019年12月4日、武装集団に5人の部下らとともに銃撃され死亡。福岡県民栄誉賞受賞。

率先して弱い者をかばえ どんな小さな命も尊べ

俺は行動しか信じない どんな時も本質をみる by 中村哲

◆1984年にパキスタン北西部ペシャワルの病院に赴任。その後、戦乱に追われたアフガン難民の苦境を知り、両国で診療所を展開していく。

転機は、2000年にアフガンで起こった大干ばつだった。乾きと飢えの犠牲者の多くは幼児。診療所の列を待つ間に腕の中で子どもが息絶え、ぼうぜんとする母親の姿は珍しくなかった。「もはや治療どころではない」やむにやまれず土木の勉強を一から始め、00年に井戸を、03年からは用水路を掘り始めた。(中略)

信念は「誰もがきたがらぬところへ行け、誰もがやりたがらぬことを為(な)せ」そうである以上、リスクをなくすのは不可能とも言える。「まぐれで生き延びてきたようなものです」記者が現地を訪れた5年前、にやりと笑った。

危険な異郷で活動を続けた半生。原点は北九州市の若松にあった。

洞海湾を望む北九州市若松区本町の一角に「玉井組事務所跡」と書かれた案内板が立っている。火野葦平の小説「花と龍」のモデルである玉井金五郎・マン夫妻が、気性の荒い川筋男たちを束ねて石炭荷役業を営んだ場所。終戦の翌年に福岡市で生まれた中村哲は2人の孫で、火野のおいだ。

生後2年で若松に移り住み、母方の実家である玉井家は半ばわが家のようなだった。祖父金五郎が亡くなった後、一家を取り仕切った祖母マンはしつけに厳しかった。火鉢の近くに泰然と座り、キセルでたばこを吸った。

「率先して弱い者をかばえ」「どんな小さな命も尊べ」折に触れて聞いたマンの説教が「自分の倫理観として根を張っている」と、中村さんは著書に書き残している。

「哲さんの言うことはよく分かる」と、いとこの玉井行人さん(62)は話す。サッカーJ3で昨年、前季の最下位から劇的なリーグ優勝を果たした「ギラヴァンツ北九州」の社長だ。

亡くなった行人さんの父は金五郎とマンの次男。いつも和服で過ごし、古くさい姿は子供心に恥ずかしかった。後に理由が分かった。人情に厚い父は大学教授の傍ら、刑務所の出所者の世話をして

いた。返ってこないと知りながら、就職面接のために「着て行きなさい」と背広を貸した。ついに1着もなくなった。「なんちかんち言うな。理屈じゃなかろうが」口癖のように繰り返していた。

よく似た言葉を、5年前に訪れたアフガニスタンで中村さんから聞いた。「何でやっているのかとよく聞かれますが、結局、理屈じゃないんですね」パソコンや書類、灰皿が置かれた中村さんの机の上には、金五郎の写真が飾ってあった。(2020/1/1西日本新聞【中村哲という生き方】から)

◆今、思い返すと、父自身も余裕がない時もきっとあったはず。いつも頭のどこかで家族のことを思ってくれている父でした。父の、自分のことよりも人を思う性格・どんなときも本質をみるという考えから出ていた言葉だったと思います。その言葉どおり背中で見せてくれていました。

私自身が父から学んだことは、家族はもちろん人の思いを大切にすること、物事において本当に必要なことを見極めること、そして必要なことは一生懸命行うということです。私が20歳になる前はいつも怒られていました。「口先だけじゃなくて行動に示せ」と言われていました。「俺は行動しか信じない」と言っていました。父から学んだことは、行動で示したいと思います。(2019/12/11 合同葬儀で長男・中村健氏のあいさつから)



\*アフガニスタンより国家勲章、名誉市民権('19夏)が授与。追悼の意で航空会社は尾翼に、芸術団体は壁面に肖像を描き、大統領自身が棺を担いだ。交差点やスーパー、診療所、赤ん坊にも氏の名前がつけられ、絵本や記念切手も販売された。